

# 張籍詩訳注(6)

——「送遠曲」「築城詞」——

畑村 学  
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (6)

Manabu HATAMURA  
Hidenori TACHIBANA

## 訳注

本篇には、11「送遠曲」・12「築城詞」(ともに中華書局『張籍詩集』巻一)の訳注を掲載する。

一に曰く「元会曲」、二に曰く「郊祀曲」、三に曰く「鈞天曲」、四に曰く「入朝曲」、五に曰く「出藩曲」、六に曰く「校獵曲」、七に曰く「從戎曲」、八に曰く「送遠曲」、九に曰く「登山曲」、十に曰く「泛水曲」。「鈞天」已上の三曲は帝の功を頌し、「校獵」已上の三曲は藩の徳を頌す。

## 11 送遠曲

### 【題解】

「送遠曲」は、遠く旅立つ人を送る曲、の意。『樂府詩集』では、鼓吹曲辞に属する。謝・「齊隨王鼓吹曲」の解題に以下のように言う。

すなわち、「元会曲」から「鈞天曲」までは、皇帝の功績を称えた内容であり、「入朝曲」から「校獵曲」までは藩鎮の徳を称えたものであるが、「送遠曲」を含む「從戎曲」以下の説明はない。森野繁夫博士『謝宣城詩集』(白帝社、一九九一年)の「從戎曲」の解説に、「從戎曲」以下、「送遠曲」「登山曲」「泛水曲」は、以上の曲(一から六までの曲を指す。筆者注記)が天子や隨王と直接に関わりのあるものであったのは少し異なり、いわゆる從軍、送別、登山、舟遊びの様子を詠じたもので、その中に天子や隨王の姿が

齊永明八年、謝・奉鎮西隨王教、於荊州道中作。一曰「元会曲」、二曰「郊祀曲」、三曰「鈞天曲」、四曰「入朝曲」、五曰「出藩曲」、六曰「校獵曲」、七曰「從戎曲」、八曰「送遠曲」、九曰「登山曲」、十曰「泛水曲」。「鈞天」已上三曲頌帝功、「校獵」已上三曲頌藩徳。

齊の永明八年、謝・は鎮西隨王の教を奉じ、荊州への道中に於いて作る。

二〇〇一年十二月十九日受理

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科講師  
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教

見え隠れするといったものである」と述べられる。一〇六頁。

謝朓の後、『樂府詩集』は、「齊鼓吹曲」として李白「入朝曲」、張籍「送遠曲」、王建「泛水曲」を収録する。謝朓の詩はいずれも五言詩であり、李白は謝朓の詩の形式・内容とも擬しており、王建も謝朓と同じく五言詩の形式をとっている。謝朓・李白・王建の詩は、一韻到底であることでも共通している。張籍はどうかと言え、内容は樂府題の示すとおり、遠方に旅立つ人を送るものであり、その点では謝朓を継承していると言えるが、詩の形式は七言古詩（換韻格）であり、謝朓や他の二人と異なっている。

なお、参考までに謝朓「送遠曲」を挙げておく。

北梁辭飲宴	北梁に 飲宴を辞し
南浦送佳人	南浦に 佳人を送る
方衢控龍馬	方衢に 龍馬を控え
平路騁朱輪	平路に 朱輪を騁す
瓊筵妙舞絕	瓊筵には 妙舞絶まり
桂席羽觴陳	桂席には 羽觴陳なる
白雲丘陵遠	白雲 丘陵遠く
山川時未因	山川 時に未だ因らず
一為清吹激	一たび清吹の激を為せば
潺湲傷別巾	潺湲たり 別れを傷む巾

#### 【本文・書き下し文】

1 戲馬臺南山簇簇	戲馬臺の南 山簇簇たり
2 山邊飲酒歌別曲	山辺に酒を飲みて 別れの曲を歌う
3 行人醉後起登車	行人 酔いて後 起ちて車に登り
4 席上回尊勸僮僕	席上 尊を回らして僮僕に勸む
5 青天漫漫覆長路	青天漫漫として 長路を覆う
6 遠遊無家安得住	遠遊して家無し 安んぞ住まるを得ん
7 願君到處自題名	願わくは 君 到る処 自ら名を題せ
8 他日知君從此去	他日 君の此より去くを知らん

#### 【押韻】

簇・僕―入声一屋、曲―入声三燭（通押）  
路―去声一一暮、住―去声一〇遇、去―去声九御（通押）

#### 【口語訳】

1 戲馬台の南には 山々が群がるように連なり  
2 その山のふもとで酒を飲み 別れの曲を歌う  
3 旅人は 酒に酔って後 立ち上がった車に乗り  
4 宴席では 酒樽を回して旅人の従者にも勧める  
5 青空は果てしなく広がり 遙かに続く旅路を覆っている  
6 遠く旅立って家も無いのだから どうして留まることができよう  
7 願くは 君よ 行く先々で自ら名を記したまえ  
8 他日 君がここから旅立って行った旅程がわかるから

#### 【語釈】

1・2 戲馬臺南山簇簇、山辺飲酒歌別曲  
〔戲馬臺〕古跡の名で、中国に同名の場所がいくつか存在する。ここではこの詩が送別の詩であることから考えて、今の江蘇省徐州市にある戲馬台を指していると思われる。項羽が築いた涼馬台のことであり、宋の武帝・劉裕がまだ宋公としてここにいた頃、重陽の節に賓客を招いて宴会を開き、故郷に帰る孔靖を見送った。その時作られた詩に、謝朓と謝靈運の「九日従宋公戲馬臺集送孔令」（ともに『文選』巻二〇）がある。李善注所引蕭子顯『齊書』に、「宋武帝為宋公、在彭城、九日、出項羽戲馬臺。至今相承以為旧準」（宋の武帝 宋公為りしとき、彭城に在りて、九日、項羽の戲馬臺に出づ。今に至るまで相承けて以て旧準と為す）とある。

六朝詩でこの戲馬台が詠われるのは、先の謝朓・謝靈運以外にはほとんど見当たらない。梁の簡文帝「和武帝宴詩二首」其一（『藝文類聚』巻五九）に、「豫遊戲馬館、教戰昆明池」（戲馬の館に豫遊し、戦を昆明池に教う）とあるが、同じ戲馬台を指したものでどうかは不明である。

唐詩でこの戲馬台を詠じたものに、李白「宣城九日、聞崔四侍御与宇文太守遊敬亭、余時登響山、不同此賞、醉後寄崔侍御二首」其二（王琦注本巻一四）に、「遥羨重陽作、応過戲馬臺」（遙かに重陽の作を羨む、応に戲馬臺に過ぐべし）とあるのは、戲馬台で盛大な宴会が開かれたことを踏まえており、また張籍と同時代の孟郊「南陽公請東桜桃亭子春讌」（華忱之・喻学才校注『孟郊詩集校注』巻四、人民文学出版社、一九九五年。以下、孟郊の詩の引用は同書に拠る）に、「方知戲馬會、永謝登龍賓」（方を知る 戲馬の會、永く謝す 登龍の賓）とあるのも、同じく劉裕の宴会を意識して用いられている。

るが、張籍のように送別の場所として捉えてはいない。

〔簇簇〕群がるように山が連なるさま。直線的ではなく平面的に広がる様子を言うと思われる。唐代以前の古い用例が見当たらない。唐代も中唐の頃になって多く用いられるようになる。山並みを形容した例として、韓愈「祖席・前字」〔繫年集釈〕卷六に、「野晴山簇簇、霜曉菊鮮鮮」(野は晴れて山簇簇たり、霜曉けて 菊鮮鮮たり)とあり、白居易「和夢遊春詩一百韻」(〇八〇三)に、「巴水白茫茫、楚山青簇簇」(巴水 白茫茫として、楚山青簇簇たり)とある。

〔山辺〕山のふもと。群がるように連なつた山々のふもとに、この別れの場である戲馬台が位置するということであろうか。「辺」は「こ」では「下」、すなわち山のふもとの意味であろう。唐詩中の「辺」の用法については、蔣紹愚氏『唐詩語言研究』(中州古籍出版社、一九九〇年)三一四頁、江藍生・曹広順氏『唐五代語言詞典』(上海教育出版社、一九九七年)二二三頁を参照。宋之問「遊禹穴回出若邪」〔全唐詩〕卷五三三に、「水低寒雲白、山辺墜葉紅」(水低くして 寒雲白く、山辺 墜葉紅し)とある。杜甫にも二例あり、「秦州雜詩二十首」其六〔詳注〕卷七に、「城上胡笳奏、山辺漢節歸」(城上に胡笳奏せられ、山辺に漢節歸る)とある。張籍にこの他二例。112「夏日閑居」に、「此時幽步遠、不覺到山辺」(此の時 幽歩遠く、山辺に到るを覺えず)とあるのも山のふもとの意味であろう。

〔飲酒〕酒を飲む。古くから使われることばで、唐詩にも多く見えるが、杜甫には熟語としての用例はない。張籍にこの他二例見える。

〔別曲〕別れの曲。「曲を別つ」等の意味では用例が見えるが、この意味での用例は少ない。庾信「王昭君」〔樂府詩集〕卷二九に、「別曲真多恨、哀絃須更張」(別曲は 真に恨み多く、哀絃は 須く更に張るべし)とある。唐詩では、楊師道「隴頭水」〔樂府詩集〕卷二二に、「笛添離別曲、風送斷腸声」(笛は離別の曲を添え、風は斷腸の声を送る)と、「離別曲」と見え、杜甫には用例がない。張籍にこの他詩句の用例はないが、379「春別曲」と詩題に見える。

3・4 行人醉後起登車、席上回尊勸僮僕

〔行人〕旅立つ人。3「雜怨」、6「行路難」の【語釈】参照。

〔登車〕車に乗る。これからいよいよ出発しようとする時の動作を言う。「古詩為焦仲卿妻作」〔玉臺新詠〕卷一に、「出門登車去、涕落百餘行」(門を出でて車に登り去るに、涕落つること百餘行)と、家を出される妻の行動を記すなかに見える。陳注は、『後漢書』范滂伝に、「滂登車攬轡、慨然有澄清天下之志」(滂 車に登り轡を攬るや、天下を澄清せんとの志有り)とあるを引く。

唐詩の用例はあまり多くなく、全部で二十例ほどしかない。杜甫に一例、「傷春五首」其四〔詳注〕卷一三三に、「奪馬悲公主、登車泣貴嬪」(馬を奪われて 公主悲しみ、車に登りて 貴嬪泣く)とあるのも、「貴嬪」が出発する時の様子を言う。張籍にはこの一例のみ。

〔席上〕ここでは別れの宴席を言う。「席上」は古くから見られることばである。文学作品では、潘岳「於賈謐坐購漢書」詩〔藝文類聚〕卷五五に、「筆下摘藻、席上敷珍」(筆下に藻を摘き、席上に珍を敷く)とある。唐詩の用例も多く、杜甫には二例見える。張籍にこの他一例。441「懷別」に、「離堂無留客、席上唯琴樽」(離堂 留客無く、席上 唯だ琴樽あるのみ)と、このこと同じく別れの宴席の意味で、しかも「樽」と一緒に用いられている。

〔回尊〕酒樽を動かす。「尊」は「樽・罇」に同じで、酒だること。別れの場面(酒宴)にしばしば詠われる。古く蘇武「詩四首」其一〔文選〕卷二九に、「我有一罇酒、欲以贈遠人」(我に一罇の酒有り、以て遠人に贈らんと欲す)と、これから遠く旅立つ人(この場合兄弟)と罇酒を酌み交わすこととある。「回尊(樽・罇)」では古い用例が見当たらない。

張籍もこの一例のみ。

〔僮僕〕召使い。旅人の従者を言う。6「行路難」の【語釈】参照。そこでも引いた王維「宿鄭州」(趙本卷四)に、「他鄉絕僮僕、孤客親僮僕」(他郷 僮僕絶え、孤客 僮僕と親しむ)とある。この僮僕について、小林太一郎氏は、「日本ではたいていの主人はいつも従僕と親しいが、中国では階級の区別が厳格で、つねは主人が従者と話しあうようなこともあまりない。それが、従者一人をつれての一人旅ともなれば、二人はおのづから親しくなるというのを以て、そういう旅のなんともいえないぬさびしさ、ことばにつくせぬ淋しさを巧みに示唆している」(集英社『王維』、『漢詩大系』10、一二六頁)と説明する。張籍のこの句と王維の詩との関連については、『唐詩鑑賞事典補編』(四川文藝出版社、一九九〇年)も指摘する。四三四頁。

「席上」のところで引いた41「懷別」にも、「僕人駆行軒、低昂出我門」(僕人行軒を駆り、低昂して我が門を出づ)と、別れの場面に車を運転する召使いの下僕が登場し、6「行路難」に出てくる「僮僕」も、旅の従者であった(弊裘羸馬苦行難、僮僕飢寒少筋力)。さらに32「羈旅行」にも、「寒虫入窟鳥帰巢、僮僕問我誰家去」(寒虫は窟に入りて、鳥は巢に帰る、僮僕に問う、誰が家にか去かんと)と、一緒に旅をする従者が、「今日は何処に泊めてもらいましよう」と尋ねている。また33「車遥遥」では、「驚鷹游兔在我傍、独唱郷歌对僮僕」(驚鷹、游兔、我が傍に在り、独り郷歌を唱いて僮僕に對す)と、家に残る家族(妻?)が、旅人の様子を想像するなかに僮僕が見え、46「寄別者」にも、「下車勸僮僕、相顧莫歎息」(車を下りて僮僕に勧め、相顧みて歎息する莫し)と、旅人とともに行動する召使いが詠われる。離別や旅愁をテーマとした詩における旅人とその従者の取り合わせは、張籍が好んで用いた表現と言えるであろう。

#### 5・6 青天漫漫覆長路、遠遊無家安得住

「青天」青天。古くから用例の見えることばで、『莊子』逍遙遊に、「今培風、背負青天而莫之夭闕者」(今、風に培り、背に青天を負いて之を夭闕する者莫し)とある。また、文学作品では、傳玄「雜詩」(『文選』卷二十九)に、「繁星依青天、列宿自成行」(繁星、青天に依り、列宿、自ら行を成す)とあり、この場合は夜空を言う。唐詩にも用例が多く、杜甫にも六例見え、「絶句四首」其三(『詳注』卷一三)に、「兩箇黃鸝鳴翠柳、一行白鷺上青天」(兩箇の黃鸝、翠柳に鳴き、一行の白鷺、青天に上る)とあるのは、張籍の詩と同じく青天を言う。

張籍にこの他二例。425「短歌行」に、「青天蕩蕩高且虛、上有白日無根株」(青天蕩蕩として、高くして且つ虚し、上には白日有りて根株無し)とある。また、王建「別鶴曲」(中華書局『王建詩集』卷一。以後王建的詩の引用は同書に拠る)に、「青天漫漫碧海重、知向何山風雪中」(青天漫漫として、碧海重なり、何れの山の風雪の中に向かうを知らんや)とあるのは、「青天漫漫」の四字の並びが張籍と同じである。

「漫漫」果てしなく広がるさま。『楚辭』離騷に、「路漫漫其脩遠兮、吾將上下而求索」(路は漫漫として其れ脩遠なり、吾、將に上下して求索せん)とある。「漫漫」は「漫漫」に同じで、この場合は道が遠くまで続くさま。空に関する例としては、謝朓「敬亭山」(『文選』卷二七)に、「溼雲已漫漫、多雨亦淒淒」(溼雲は已に漫漫と、多雨は亦た淒淒たり)、江淹「別賦」(『文

選』卷一六)に、「風蕭蕭而異響、雲漫漫而奇色」(風は蕭蕭として響を異にし、雲は漫漫として色を奇にす)とあり、ともに雲が湧き広がる様子を言う。

唐詩にも用例多く、例えば盧照隣「七夕泛舟二首」其一(『全唐詩』卷四二)に、「天潢殊漫漫、日暮独悠悠哉」(天潢、殊に漫漫として、日暮れて独り悠なるかな)とあるのは、空の広さを水の広がり準えた例で、張籍と同じく「天」とともに用いられている。杜甫にも一例、「白沙渡」(『詳注』卷九)に、「水清石礚礚、沙白灘漫漫」(水清くして、石礚礚たり、沙白くして灘漫漫たり)とあり、灘の広がるさまを言う。

張籍にも一例。60「送辺使」に、「寒沙陰漫漫、疲馬去悠悠」(寒沙陰漫漫として、疲馬、去りて悠悠たり)とある。

「長路」果てしなく続く道。「古詩十九首」其六(『文選』卷二九)に、「還顧望旧郷、長路漫浩浩」(還り顧みて、旧郷を望めば、長路、漫として浩浩たり)とあり、また謝靈運「南樓中望所遲客」(『文選』卷三〇)、「杳杳日西頽、漫漫長路迫」(杳杳として、日は西に頽れ、漫漫として、長路迫る)と、いずれも「漫」とともに用いられている。唐詩にも用例が多く、杜甫にも二例見える。「送盧十四弟侍御護韋尚書靈輿上郡二十韻」(『詳注』卷二三)に、「長路更執紼、此心猶倒衣」(長路、更に紼を執る、此の心、猶お倒衣)とあるのは、このことと同じ送別の詩で、旅人の道程を表している。張籍の用例はこれ一例のみ。

「覆」は旅人の行く手を覆うように空が広がっていることを言う。『莊子』大宗師に、「天無私覆、地無私載」(天は私りて覆うこと無く、地は私りて載すること無し)と、「覆」が「天」と一緒に使われる例がある。「覆路」(路を覆う)の用例は見当たらないが、同じ意味で「掩路」の語が、潘岳「懷旧賦」(『文選』卷一六)に、「晨風淒以激冷、夕雪霽以掩路」(晨風は淒として以て冷を激し、夕雪は霽として以て路を掩う)と見える。李善注所引「埤蒼」に、「掩、覆也」とある。

「遠遊」遠く旅に出る。古くからあることばで、『論語』里仁篇に、「子曰、父母在、不遠遊。遊必有方」(子曰く、父母在せば、遠く遊ばず。遊ぶこと必ず方有り)とある。文学作品では、『楚辭』に遠遊篇があり、その文中にも「悲時俗之迫阨兮、願輕舉而遠遊」(時俗の迫阨を悲しみ、輕舉して遠遊せんことを願う)と見える。唐詩の用例も多い。杜甫にも多く見え、「遠遊」と題する二首の詩もある(『詳注』卷一一、一二)。張籍にこの他二例有り、19「各東西」には、「遠遊不定難寄書、日日空尋別時語」(遠遊定まらずして書を寄せ難し、日日空しく尋ぬ、別時の語)とある。

〔無家〕留まるべき家がないの意であろう。早く『毛詩』召南「行露」に、「誰謂女無家、何以速我獄」(誰か謂う 女に家無しと、何を以て我を獄に速くや)とあり、この場合は家族がないこと。また、班彪「北征賦」(『文選』卷九)に、「野蕭條以莽蕩、迥千里而無家」(野は蕭條として以て莽蕩たり、千里に迥かにして家無し)とあるのは、千里の彼方まで人家がないの意。唐詩にも用例が多く、杜甫の詩にも多く見える。有名な「無家別」(『詳注』卷七)は、家族がないこと。住むべき家が無いという意味では、「不離西閣二首」其一(『詳注』卷一八)に、「失学従愚子、無家任老身」(失学 愚子に従す、無家 老身に任す)とある。

張籍に熟語としての「無家」は二例あり、135「題清徹上人院」に、「愛養無家客、多伝得効方」(無家の客を愛養し、多く効を得るの方を伝う)とある。この場合、「無家客」とは出家した人で僧侶を指す。

〔安得住〕どうして留まることができよう。同じ字の並びが、韋応物「初発揚子寄元大校書」(『全唐詩』卷一八七)に、「世事波上舟、沿洄安得住」(世事は波上の舟、沿洄して安んぞ住まるを得ん)と見える。

#### 7・8 願君到处自題名、他日君從此去

〔到处〕至る所。あちこちに。ここでは旅の行く先々でという意味で解釈した。高適「送田少府貶蒼梧」(『全唐詩』卷二二三)に、「江山到处堪乘興、楊柳青青那足悲」(江山 到处 興に乗ずるに堪え、楊柳青青として 那ぞ悲しむに足らん)とある。杜甫にも一例あり、「奉贈韋左丞丈二十二韻」(『詳注』卷一)に、「殘杯与冷炙、到处潜悲辛」(殘杯と冷炙と、到处 潜かに悲辛す)とあるのも、あちこちの意味。

張籍にこの他一例。227「送施肩吾東歸」に、「早聞詩句伝人徧、新得科名到处閑」(早に聞く 詩句の人に伝ること徧しと、新たに科名を得て 到る処閑かなり)とある。

〔題名〕名を記す。唐代以前の文学作品や唐詩にあまり用例が見られない。数少ない用例として、韋応物「答河南李士巽題香山寺」(『全唐詩』卷一九〇)に、「牆宇或崩剝、不見旧題名」(牆宇 或いは崩剝し、旧題名を見ず)とあるのは、過去に記した名を言う。張籍自身の用例では、同じく送別の詩である366「送元八」に、「明日城西送君去、旧遊重到独題名」(明日 城西 君が去くを送り、旧遊 重ねて到りて 独り名を題す)とあり、この場合は張籍

自身が後から別れの場を訪れて名を記す意味になる。297「哭孟寂」にも、「曲江院裏題名処、十九人中最少年」(曲江院裏 名を題せし処、十九人中 最も少年なり)とある。科挙進士科に合格した同年の進士が、そろって慈恩寺のところに行ってその壁に自分の名前を書き記すという習慣があり、この詩はそのことを踏まえ、同年十九人のなかで孟寂が最年少であったことを言う。

〔他日〕将来のある日。過去のある時を指す場合もあるが、ここでは内容から未来のこと。唐以前の詩文に見え、唐詩にも用例が多い。一例として、張説「岳州別子均」(『全唐詩』卷八七)、「他日将何見、愁来独倚門」(他日 将に何ぞ見ん、愁い来たりて独り門に倚る)とあるのは、こと同じく未来のある日を指す。

なお、この二句、久保天随『古詩評釈』(新声社、一九〇〇年)や前掲『唐詩鑑賞辞典補編』等では、「行人」がこれから先、旅の途中で訪れる場所所に、後に尋ねて行けるよう名を記せと詠っているとして解釈する。こうした解釈は、清・王堯衢の「願君到处題名、使知從此而去、不但後日易尋、亦各無忘此別也」(『唐詩合解箋注』卷三)という解釈に通ずるものである。これとは別に、あちこちに名を記す場所は別離の場、すなわち戯馬台に限定し、この場所から君が旅立ったことがはっきりわかるだろうとする解釈も可能である。ここではどちらか決めたいが、遠遊して留まる場所はどこにもないとする前二句とのつながりから、前者の解釈、すなわち旅の先々にあちこち名を記すという解釈に従うことにした。

#### 【補】

この詩の構成は、前半四句、後半四句に分かれ、前半では現在の別離の場面が、後半では未来の時間における、行人の旅程および送る側の様子が記される。

旅人が別離の後に歩むであろう旅程を詠ずることは、送別詩の特徴のひとつであり、張籍の場合、第5・6句がそれに当たる。張籍のこの詩が一般的な送別詩と異なるのは、第7・8句の、別離後の未来に旅人の足跡を尋ねる自分自身を想像する(「名を題す」を別離の場に限ったもう一つの解釈の場合は、別離の場を再び訪れてこのたびの別離を懐かしむ自分を想像する)という点にあるであろう。清の沈徳潜が、「従前送遠詩、此意未曾写到」(『唐詩別裁集』卷八)と述べているのも(張籍が最初かどうかは確かめてみる必要があるにしても)、この点を指したものである。

12 築城詞

(畑村)

【題解】

城壁を築くうた。『樂府詩集』卷七五「雜曲歌辭」の部分に「築城曲」が見え、次のようにいう。

馬暱『中華古今注』曰、「秦始皇三十二年、得讖書云、『亡秦者胡』。乃使蒙恬擊胡、築長城以備之」。『淮南子』曰、「秦發卒五十萬、築脩城。西屬流沙、北擊遼水、東結朝鮮。中國內郡、輓車而餉之。後因有築城曲、言築長城以限胡虜也。又有『築城睢陽曲』、与此不同」。

『古今樂錄』曰、「築城相杵者、出自漢梁孝王。孝王築睢陽城、方十二里、造唱聲、以小鼓為節、築者下杵、以和之。後世謂此為睢陽曲」。『晋太康地記』曰、「今樂家『睢陽曲』、是其遺音」。『唐書』樂志曰、「『睢陽操』用舂牘」是也。按『漢書』曰、「梁孝王広睢陽城七十二里」。而云十二里、未知孰実。

馬暱の『中華古今注』に曰く、「秦の始皇の三十二年、讖書を得るに云ふ、『秦を亡ぼす者は胡なり』と。乃ち蒙恬をして胡を撃たしめ、長城を築いて以て之に備ふ」と。『淮南子』に曰く、「秦 卒五十万を發し、脩城を築く。西は流沙に屬し、北は遼水を撃ち、東は朝鮮に結ぶ。中國の内郡、車を輓きて之を餉る。後 因りて築城曲有り、長城を築いて以て胡虜を限るを言うなり。又た『築城睢陽曲』有り、此と同じからず」と。

『古今樂錄』に曰く、「築城相杵なる者は、漢の梁の孝王より出づ。孝王 睢陽城を築き、方十二里、唱聲を造り、小鼓を以て節を為し、築く者 杵を下し、以て之に和す。後世 此を謂いて睢陽曲と為す」と。『晋太康地記』に曰く、「今の樂家の『睢陽曲』、是れ其の遺音なり」と。『唐書』樂志に、「『睢陽操』は舂牘を用う」と曰うは是れなり。按ずるに『漢書』に曰く、「梁の孝王 睢陽城を廣むること七十二里」と。而るに十二里と云うは、未だ孰れの実なるかを知らず。

この記述によれば、秦の長城建設を歌う「築城曲」があり、それは長城を築いて異民族を防ぐことがテーマとなっている。一方、「築城睢陽曲」「睢陽曲」などと呼ばれる曲が別にあつて、漢の梁の孝王が創設した樂曲で、小

な太鼓でリズムを取り、城を築くものがツチでそれに合わせたということである。

どちらも古辭は残つておらず、『樂府詩集』には、まず張籍のこの詩を「築城曲」として載せ、次に元稹の五言五解（四句一解）の作一首と陸龜蒙の五言四句の二首を載せている。

その他、『全唐詩』では、顧況の「上古之什補亡訓傳十三章」に「築城二章」（卷二六四、章四言八句）があり、晩唐の劉駕の「築台詞」（卷五八五）が一に「築城詞」に作り（五言四句）、曹鄴に「築城三首」（卷五九二、五言四句）、顧雲に「築城篇」（卷六三七、七言一六句）が見える。

これらを含めて、築城を扱った作品の流れについては、【補】の部分で触れることにする。

【本文・書き下し文】

- 1 築城處 城を築く処
- 2 千人萬人抱把杵 千人万人 杵を抱き把る
- 3 重重土堅試行錐 重重として土は堅く 試みに錐を行うも
- 4 軍吏執鞭催作遲 軍吏 鞭を執り 催して遅しと作す
- 5 來時一年深磧裏 來りし時より一年 深磧の裏
- 6 盡着短衣渴無水 尽く短衣を着て 渴するも水無し
- 7 力盡不得休杵聲 力尽くるも 杵聲を休むるを得ず
- 8 杵聲未定人皆死 杵聲未だ定まらずして 人皆な死す
- 9 家家養男當門戸 家家 男を養いて 門戸に當つるに
- 10 今日作君城下土 今日 君が城下の土と作る

【口語訳】

- 1 長城を築くところでは
- 2 何千何万もの人々が ツチをしつかりと抱き握っている
- 3 重なり合つて土は硬くなり キリで刺して試せるほどになつても
- 4 軍の役人は鞭を持ち 仕事が遅いと遅いと催促する
- 5 ここへ來てから一年 深い砂漠の中で過ごし
- 6 着る物はみんな短い衣 のどが渴いても水もない
- 7 力尽きても 手を休めてツチ音を停めることはできず
- 8 ツチ音が調わないうちに みな死んでしまう
- 9 家ごとに男子を養つて 一家の支えとしているのに

10 今や 大君の城壁の下の土くれになつてしまった

【押韻】

處・杵—上声八語  
錐・遲—上平六脂  
裏—上声六止 水・死—上声五旨 (古詩通押)  
戸・土—上声一〇姥

【語釈】

1・2 築城処、千人万人抱把杵

【築城処】長城を築いているところでは。

「築城」は、ここでは長城を築くこと。築城を扱った詩については【補】の部分で触れるので、ここではことばの用例をいくつか挙げるに止める。古く『毛詩』大雅「文王有声」に「築城伊滅、作豊伊匹」(城を築く、伊れ滅、豊を作る 伊れ匹)の句が見える。文王が豊の地に城を築いたことを称えるものである。六朝詩では、鮑照の「代淮南王」(『集注』卷四)に「築城思堅劍思利、同盛同衰莫相棄」(城を築くには堅からんことを思い、劍には利からんことを思う、共に盛んに共に衰え、相い棄つる莫し)という用例がある。唐詩においては、後に【補】の部分に引く例のほか、李白の「戰城南」(王琦注本卷三)に「秦家築城備胡処、漢家還燄火燃」(秦家 城を築いて胡に備えし処、漢家 還た燄火の燃ゆる有り)というなどの例が見える。なお、『唐文粹』『樂府詩集』等は「処」を「去」に作っている。「去」であれば、「城を築きに出かける」ということになる。

「千人万人」何千何万もの人々が。飾り気のない平明な措辞で、長城建設にかり出された民衆の口調を借りた、口語的な表現と思われる。

詩における以前の用例は杜甫に二例見えるのみ。「李鄴県丈人胡馬行」(『詳註』卷六)に「自矜胡驪奇絶代、乘出千人万人愛」(自ら矜る 胡驪は 奇なること絶代、乗り出づれば 千人万人愛すと)といい、「清明」(『詳註』卷二三)に「著処繁華矜是日、長沙千人万人出」(著処 繁華 是の日に矜る、長沙 千人万人出づ)という。前者は李某が馬を自慢する口吻をそのまま伝えたものであり、後者は前の句の「著処」も「至るところ」の意の口語であり(前掲塩見邦彦氏『唐詩口語の研究』参照)、ともに口語的な表現であると思われる。

張籍にはこの一例のみ。

「抱把杵」「杵」は土を打ち固めるツチ。「抱把」いだきにぎる」というのはそれをしっかりと握っているということであろうか。「抱把」のことばは、他に用例が見当たらない。

静嘉堂抄本と『全唐詩』卷三八二は「齊把杵」に作り、『唐文粹』『樂府詩集』は「齊抱杵」に作る。これらに従えば、たくさんの人々がみんな揃って「杵」を持つていることになる。

なお、「杵」の文字が詩に用いられる場合、以前の例では大部分がキヌタの意であり、これと葉をつくキネの意味での用例が(月中のウサギの例をも含む)、ほぼすべてを占めている。城壁を固めるツチの意で用いた用例は見当たらないようだ。

後の例にはなるが、ツチの意味で「抱」の文字とともに用いた例として、千瀆の「長城」(『全唐詩』卷五九九)に「死者倍堪傷、僵屍猶抱杵」(死者倍ます傷むに堪えたり、僵屍 猶お杵を抱く)の句がある。この詩と同じく、長城建設にかり出された民衆の苦勞を詠じたものである。

冒頭の二句、たくさんの人々が長城建設の勞役にかり出されていることという。陳注が指摘するように、この二句は陸龜蒙の「築城詞」(『全唐詩』卷六二七)の「城上一培土、手中千万杵」(城上 一培の土、手中 千万の杵)という表現に影響を与えていると思われる。

3・4 重重土堅試行錐、軍吏執鞭催作遲

【重重土堅】「重重」は重なる形容。土を何層にも重ねて、ツチで突き固めて行くことをいうのであろう。いわゆる「版築」の技法である。

詩における用例としては、王筠の「陌上桑」(『文苑英華』卷二〇八)に「重重相蔭影、軟弱自芬芳」(重重として 相い蔭影し、軟弱にして 自ずから芬芳)という例がある。桑の葉が重なり合う形容である。

唐詩においては、張説の「遥同蔡起居偃松篇」(『全唐詩』卷八六)に「懸池的的停華露、偃蓋重重瑞雲」というなどの例がある。これは松の枝が重なり合う形容。以上の二例のように、植物に用いられることが多く、他に衣服や宮殿などに用いられる。

杜甫には三例あるが、そのうち、「百舌」(『詳註』卷一二)に「百舌來何処、重重祇報春」(百舌 何れの処より來たる、重重として 祇だ春を報

ず)といい、「風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友」(卷二三)に「鳥几重重縛、鶉衣寸寸針」(鳥几 重重に縛り、鶉衣 寸寸に針す)という例は、動作が重なること⇨回数が多いことをいう例のようである。

張籍には他に六例の用例があり、好んで用いた表現の一つといえるかもしれない。張籍も植物に関して用いることが多いが、415「廢宅行」に「去時禾黍埋地中、飢兵掘土翻重重」(去る時 禾黍 地中に埋む、飢兵 土を掘りて 翻すこと重重)というのは動作の重なりで、何度もあちこちを掘り起すということであろう。

なお、築城に関して堅さが求められるということについては、先に引いた鮑照の例もあり、唐詩においては張説の「岳州行郡竹籬」(『全唐詩』卷八六)に「版築恐土疏、裏城嫌役重」(版築 土の疏なるを恐れ、裏城 役の重きを嫌う)というなどの例がある。

〔試行錐〕土が堅くなつたかどうか、キリで刺して試してみる。

「錐」はキリ。詩においては、「囊中の錐」や「錐刀の用」の慣用表現で用いられるほか、尖つたもの、鋭いものの代名詞としてしばしば詩に詠じられる。元稹の「大鶻鳥」(『元稹集』卷二)にも「有力強如鶻、有爪利如錐」(力有りて 強きこと 鶻の如く、爪有りて 利きこと錐の如し)の句がある。

「行錐」で、キリで刺すの意であろう。用例は未見。

『全唐詩』注によれば、「用錐」に作るテキストもある。徐注もいうように、どちらでも意味の上では大差はないであろう。「用錐」であれば、『莊子』秋水に「是直用管闚天、用錐指地也。不亦小乎」という文がある。「用」は「以」と同じで、介詞としての用法だろう。「用錐」も用例は見られない。

「試行」の形で詩に用いられた例としては、六朝期に一例、中唐期に二例を見出せたが、「行」の文字はすべて「ゆく」の意のようである。

「試用」は独孤及の「送虢州王録事之任」(『全唐詩』卷二四七)に「盤根儼相植、試用発硎刀」(盤根 儼し相い値わば、試みに用いん 硎を発するの刀)という句が見えるほか、詩における用例が見当たらない。

「錐」の文字、張籍はここにもみ用いており、「試行」「試用」の例はこれのみ。

〔軍吏〕軍隊の将帥を指すことばとして『周礼』等に見えるが、ここでは軍隊に属する小役人のことをいうのであろう。築城作業の監視役である。

以前の詩においてこのことばが用いられた例は、杜甫の「将曉二首」其二(『詳註』卷一四)に「軍吏迴官燭、舟人自楚歌」(軍吏 官燭を迴らし、舟

人 自ら楚歌す)というのが唯一のようである。これは杜甫の旅立ちを見送りに来た軍隊の役人をいうようだ。

張籍にはもう一例、71「送防秋将」に「元戎選部曲、軍吏換旌旗」(元戎部曲を選び、軍吏 旌旗を換う)の句がある。

ことばの用例は少ないが、長城建設作業の監視の役人が詠じられる例は以前からあり、陳琳の「飲馬長城窟行」(『玉臺新詠』卷一)にも「長城吏」が登場して、「官作自有程、築築諧汝声」(官作 自ら程有り、築を挙げて汝が声を諧えよ)と仕事を催促する。杜甫の「潼関吏」(『詳註』卷七)にも、潼関の城壁建設を監督する役人が登場している。

〔執鞭催作遲〕ムチを持って、仕事が遅いと催促する。

「執鞭」はムチを持つ。陳注は『論語』述而に「富而可求也、雖執鞭之士、吾亦為之」(富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ亦た之を為さん)というのを引く。これは御者が馬のムチを持つという例。

これに基づいて、人に対してへりくだり、下働きを務めることの表現に用いられる。六朝詩には一例しか見いだし得なかったが、その任昉の「贈王僧孺詩」(『梁書』王僧孺伝)に「誰其執鞭、吾為子御」(誰か其れ 鞭を執る、吾れ子の為に御せん)というの、その例。

唐詩の先行する例は二例のみのものであるが、孟浩然の「書懷貽京邑同好」(『全唐詩』卷一五九)に「執鞭慕夫子、捧檄懷毛公」(鞭を執りて 夫子を慕い、檄を捧げて 毛公を懷う)といい、顧況の「帰陽蕭寺有丁行者能修無生忍担水施僧况帰命稽首作詩」(『全唐詩』卷二六四)に「化仏示持帚、仲尼称執鞭」(化仏 帚を持つを示し、仲尼 鞭を執ると称す)というの、同様である。

張籍にもう一例、178「贈殷山人」に「講序居重席、群儒願執鞭」(講序重席に居り、群儒 執鞭を願う)というのと同じであろう。

ただし、役人が人民をむち打つという描写は、以前にも例がある。高適の「封丘県」(『全唐詩』卷二一三)に「拝迎官長心欲碎、鞭撻黎庶令人悲」(官長を拝迎して 心碎けんと欲し、黎庶を鞭撻して 人をして悲しましむ)といい、元結の「春陵行」(『全唐詩』卷二四一)に「追呼尚不忍、況乃鞭撻之」(追呼するすら 尚お忍びず、況んや乃ち 之を鞭撻するをや)というなどの例がある。

杜甫の「自京赴奉先県詠懷五百字」(『詳註』卷四)にも「彤庭所分帛、本自寒女出。鞭撻其夫家、聚斂貢城闕」(彤庭 分かつ所の帛、本 寒女より出づ。其の夫家を鞭撻し、聚斂して 城闕に貢す)という例があり、一般民衆の悲惨な状況を描き出している。



この二句、労役にかり出された人々がつき固めて、キリで堅さを確かめられるほどになっても、監督の役人は満足せず、早くやれと鞭打たれることをいう。作業の正確さの上に、迅速さまで要求されるという、極めて過酷な状況である。

### 5・6 来時一年深磧裏、尽着短衣渴無水

〔来時一年〕李樹政注にいうように、ここに来てから一年が過ぎた、ということであろう。「来時」も「一年」も常用語で詩の中にも膨大な用例があるが、「来時一年」は用例を探し得なかった。

〔深磧裏〕「磧」はもともと、河原や中洲を意味する文字であるが、岑参の「磧中作」の詩題に端的に現れているように、砂漠の意味で用いられる。

〔深磧〕の語は以前の用例が見当たらない。同時期の姚合の「送獨孤煥評事赴豊州」(『全唐詩』卷四九六)に「深磧路移唯馬覚、断蓬風起与鷗平」(深磧路移りて 唯だ馬のみ覚え、断蓬 風起りて 鷗と平らかなり)の句がある。

〔尽着短衣〕みな短い着物を着ている。

〔短衣〕は、短い着物。『史記』叔孫通伝に、儒服を着て高祖から憎まれた叔孫通が楚製の「短衣」に着替えたというエピソードが見える。

六朝の詩には一例が見えるのみ。梁の武帝の「邯鄲歌」(『樂府詩集』卷七六。『古詩紀』は晋の雜曲歌辞ともしている)に「短衣妾不傷、南山為君老」(短衣 妾は傷まず、南山 君が為に老いん)という。これは女性の例であるが、民衆の衣服の例であろう。

唐詩では、杜甫以外に先例が見られないが、杜甫には五例の用例があり、好んで用いたことばのようである。その中で「送舍弟穎赴齊州三首」其三(『詳註』卷一四)に「短衣防戰地、匹馬逐秋風」(短衣 戰地に防ぎ、匹馬 秋風を逐う)というのは、戦乱の地では貧しい格好をして防備せよとアドバイスした部分に用いられている。

張籍には他に一例、419「江村行」に「耕場磷磷在水底、短衣半染蘆中泥」(耕場 磷磷として 水底に在り、短衣 半ば染まる 蘆中の泥)の句がある。これも民衆の衣服を描写した例である。

〔尽着〕、『唐文粹』『樂府詩集』では「着尽」に作る。こちらであれば「着るは尽く短衣にして」の訓みになる。

〔渴無水〕のどが渴いても、水もない。民衆の極限状態を描いている。

極限的な飢えの方は詩にしばしば登場し、「隔谷歌」二首其一(『樂府詩集』卷二五)に「食糧乏若為活、救我来、救我来」(食糧 乏尽き 活くるを若為せん、我を救い来たれ、我を救い来たれ)といい、王粲の「七哀詩二首」其一(『文選』卷二三)に「路有飢婦人、抱子棄草間」(路に飢えたる婦人有り、子を抱きて 草間に棄つ)というなどの例がある。杜甫の「自京赴奉先縣詠懷五百字」(前出)にも「入門聞号咷、幼子餓已卒」(門を入りて 号咷を聞く、幼子 餓えて已に卒す)という傷ましい表現がある。

これに対し渴きの方は、友人に会いたい気持ちの比喩や、ごく一般的な喉の渴きを表現したものが多く、このような命に関わる切実な渴きが表現された例は、あまり見当たらないようである。同時期の白居易の「早熱二首」其二(三〇二六)に「飛禽鷙將墮、行人渴欲狂」(飛禽 鷙 墮つて將に墮ちんとし、行人 渴して狂わんと欲す)というのは、その乏しい例の一つといえる。

飲み水がない意味での「無水」の用例は、張籍にもう一例、421「白鬮吟」に「六月人家井無水、夜聞鼙声人尽起」(六月 人家 井に水無く、夜 鼙声を聞きて 人尽く起く)というほか、六朝詩・唐詩ともに見当たらないようである。こちらは早魃の表現。なお、「渴」の文字は、張籍には他に用例が見えない。

この一年間の苦勞を振り返る二句。6句は、衣食住のうちの、衣と食(飲)の面の苦しみが痛切に描かれている。

### 7・8 力尽不得休杵声、杵声未定人皆死

〔力尽不得休杵声〕力はなくなっても、ツチの音を停めることはできない。力尽きても、作業は続けなければならぬ。

2「抱把杵」の語釈で触れたように、以前の詩では、「杵」の文字は大部分がキヌタの用例であり、「杵声」の語も、以前の詩の用例は全て、秋の夜に衣を打つ音を聞くというようなお決まりの文脈の中で用いられている。六朝詩では謝惠連の「擣衣」(『文選』卷三〇)に「欄高砧響発、楹長杵声哀」(欄高くして 砧響発し、楹長くして 杵声哀し。欄の字は集注本による)という用例がある。

唐詩では、戎昱の「秋月」(『全唐詩』卷二七〇)に「江干入夜杵声秋、百尺疏桐挂斗牛」(江干 夜に入りて 杵声秋なり、百尺の疏桐 斗牛を挂く)

といい、王建の「擣衣曲」(『全唐詩』卷二九八)に「婦姑相對神力生、双擣白腕調杵声」(婦姑 相對対して 神力生じ、双つながら白腕を擣げて 杵声を調う)といい、孟郊の「聞砧」(『全唐詩』卷三七四)に「杵声不為衣、欲令遊子帰」(杵声 衣の為ならず、遊子をして帰らしめんと欲す)というなどの用例がある。

張籍以後で、于漬の「沙場夜」(『全唐詩』卷五九九)に「城上更声発、城下杵声歌」(城上 更声発し、城下 杵声歌く)という例は、ツチの音の例であろう。

なお、李冬生注は「杵声」を働く人々の歌声と解するが、素直にツチの音と解してよいのではあるまいか。

「杵声未定人皆死」ツチの音の調子がととのわぬうちに、人はみな死んでしまふ。

「未定」は静嘉堂本・『全唐詩』は「未定」に作り、徐注は「非なり」とするが、こちらでも解釈できよう。先に引いた陳琳の「飲馬長城窟行」にも「築築諧汝声」(築を挙げて 汝が声を諧へよ)という句があった。

「未定」であれば、「ツチの音も消えないのに」。似た表現としては、後の例で文字の異同もあるが、劉駕の「築台詞」(『全唐詩』卷五八五)に「前杵与後杵、築城声不住」(前杵と後杵と、城を築いて 声住まらず)の句がある。ただし、『全唐詩』では、声字に注して「一に功に作る」という。

「人皆死」というのも、ストレートで強い表現。「皆死」のことばの用例を詩に求めると、賈至の「燕歌行」(『全唐詩』卷二三五)に「六軍将士皆死尽、戰馬空鞍帰故営」(六軍の将士 皆な死尽くし、戰馬 鞍を空しくして 故営に帰る)というなどの例が見い出せる。これは戦死を表現したもの。

この二句、いわゆる蟬聯体を用いて、聴覚の面から表現している。死んでも作業をやめることができない苛酷な状況を描写した二句である。

「杵声」は、語釈で触れたように、従来はキヌタの音を表現することばとして用いられていた。ここで張籍は、槌音を表現することばとして新たな用い方をしていると考えられる訳だが、故郷で夫を待つ妻が響かせる「杵声」キヌタの音と、辺境で故郷を思う夫がたてる「杵声」ツチの音とを、オーバーラップさせた表現なのかもしれない。そして、故郷の家を意識した、末尾の二句へとつながっていくのではないだろうか。

【家家】7「征婦怨」の第4句に見えた。その【語釈】参照。

【養男】男を養う。六朝詩に用例を見ず、唐詩における用例は、この他には張祜の「捉搦歌」(『全唐詩』卷五一〇)に「養男男娶婦、養女女嫁夫」(男を養えば 男は婦を娶り、女を養えば 女は夫に嫁す)という例を見るのみ。

ただ、李樹政注が引く秦の時の民謡(『水経』河水注に引く楊泉『物理論』に記載。ただし、陳琳の「飲馬長城窟行」の伝訛したものとされる。【補】に引く副島氏論文参照)に「生男慎莫舉、生女哺用脯。不見長城下、尸骸相支拄」(男を生まば 慎んで挙ぐる莫れ、女を生まば 哺するに脯を用いよ。見ずや 長城の下、尸骸 相い支拄するを)というように、戦乱などの場合に男を育てることが無意味になるといふ表現の例はしばしば見える。

張籍の2「西州」にも「生男不能養、懼身有姓名」(男を生むも 養う能わず、身に姓名有るを懼る)の句が見えた。その【語釈】参照。

【当門戸】門戸は、常見のことば。ここでは家、一族の意。「当門戸」で、一家をきりもりする、一族を支えるの意。「家家」が主語なので、他動詞に訓んでおいた。似た例として、陳注も引く古楽府「隴西行」(『玉台新詠』卷一)に「健婦持門戸、勝一大丈夫」(健婦 門戸を持すれば、一大丈夫に勝る)の句がある。

また、傅玄の「苦相篇・予章行」(同書卷二)には「男兒当門戸、墮地自生神」(男兒 門戸に当たると、地に墮ちれば 自ずから神を生ず)の句がある。男子は一家の支えとなることをいう。

唐詩には他に一例のみ、杜甫の「負薪行」(『詳註』卷一五)に「土風男を坐せしめ 女をして立たしむ、男は門戸に当たり 女は出入す」(土風坐男使女立、男当門戸女出入)という。これは男が家でじっとして女が外で働く夔州の風俗を詠じた例で、こことは少し異なる。

【今日】これも常用語で、詩における用例も極めて多い。張籍にも他に一七例の用例がある。辺境で夫が死ぬことに関して用いた例として、324「隣婦哭征夫」に「今日軍回身独歿、去時鞍馬別人騎」(今日 軍は回るも 身は独り歿し、去りし時の鞍馬 別人騎る)という句がある。

この結びに「今日」のことばを用いているのは、前の句を承けて、故郷で養われていた過去と現在の対比が述べられているのであるが、その奥には、悪名高い始皇帝の長城建設といった過去のことではないという対比もあり、さらに、「今こうしている瞬間も」と、現在進行形を強調する気持ちもあるのではないだろうか。

〔作君城下土〕天子の城壁の下の土になるのだ。

築城の苦しみを詠じた鮑溶の「長城」(『全唐詩』卷四八五)にも「生人半為土、何用空中原」(生人 半ば土と為る、何を用てか 中原を空しくせん)という句がある。

また、曹鄴の「築城三首」其三(『全唐詩』卷五九二)には「不知城上土、化作宮中火」(知らず 城上の土、化して宮中の火となるを)という。これは秦の築城で死んだ者の怨嗟が燃え上がり、阿房宮を焦がす火となったことをいう例のようだ。

なお、9「野老歌」に「化為土」という表現が見えた。その【語釈】参照。

結びの二句、先の二句で強いことばで労働者たちの死を述べたのを承けて、その死の意味を問うているように思われる。家にとってはその死は極めて重いのだが、天子にとってはその死は土くくれのように軽いうことが対比的に述べられているようだ。

#### 【補】

この詩、押韻によれば、1・2句／3・4句／5／8句／9・10句と分けられるが、李樹政注には、1／4句を労役の苛酷さを描いた第一層、5・6句を生活の困難さを描いた第二層、7・8句を死にゆく運命を描いた第三層としている。

張籍のこの詩は、長城建設にかり出された人々の辛苦の様子が中心になっているが、築城に關した詩の流れを概観しておこう。なお、これらの中で、秦の長城建設を批判する系統の文学作品については、副島一郎氏に「孟姜女物語・陳琳『飲馬長城窟行』・長城詩」(『興膳教授退官記念中国学論集』所収、汲古書院、二〇〇〇年)があり、唐代の辺防政策との関連を含めて、詳しく考察されている。

『樂府詩集』の「築城曲」の部分には由来を示すのみで、古辞や前代の歌詞は残されていないが、長城建設のような集団の労働において歌が歌われ、リズムを取って作業の効率や志気を高める役割を果たすことは、極めて自然なことであろう。その歌の中で、労役に苦しむ人々の怨みが詠じられることもしばしばであったに違いない。

『春秋』襄公十七年の『左伝』にも、宋の皇国父が平公のために、農家の

收穫期に台を築かせ、子罕が收穫期が終わるまで待つよう請うたが許されず、台を築く者たちは「沢門之哲、実興我役、邑中之黔、実慰我心」(沢門の哲「色の白い人」皇国父をいう)、実に我が役を興し、邑中の黔「色黒の人」子罕をいう)、実に我が心を慰む」と歌ったという話がある。後で子罕が「有詛有祝」(呪つたり誉めたり)と表現しているように、この歌の前半にも、人民の怨嗟の聲が歌われている。

『毛詩』大雅「緜」では、「築之登登、削屢馮馮」(之を築くこと 登登たり、削ること 屢屢にして 馮馮馮たり)と、多くの人民が城壁を築く様子が描写されている。これは有徳の王のために人々が力を惜しまず楽しんで働く描写であると解釈されている。この詩ではそうであっても、有徳の王への賛辞が、苛酷な王に対する怨嗟の聲と表裏一体のものであることは、『左伝』の例からも容易に想像される。築城が行われるところ、恐らく労働の苦勞を詠ずる歌があつたであろうが、伝えられていないようだ。

下つて三国の陳琳に、語釈でもしばしば引いた「飲馬長城窟行」(『玉臺新詠』卷一)がある。この詩には、先に触れたように監督の役人が登場して作業を促すほか、「男兒寧當格鬪死、何能怫鬱築長城」(男兒 寧ろ當に格鬪して死すべし、何ぞ能く怫鬱として 長城を築かん)と、長城建設にかり出された庶民の聲が詠じられている。後半部分は、家に残した妻との手紙のやりとりとなつており、「男を生まば」云々の悲痛なことばも記されている。ただ、張籍の「築城詞」では、築城の苛酷な労働そのものが主題になっているのに対して、陳琳のものは夫婦が引き裂かれている悲しみがテーマとなっているという点で違いが見られる。

続く六朝期の詩には、築城の様子が詠じられることはほとんどなかったようだ。管見の及んだ例は二例、「築城」の語釈に引いた鮑照の場合は比喩であるし、隋の煬帝の「飲馬長城窟行」(『樂府詩集』卷三八)には「万里何所行、横漠築長城」(万里 何の行く所ぞ、漠を横ぎりて 長城を築く)の句が見えるが、詩に歌われるのは、長城建設ではなく旅の苦勞である。

唐に入つて、築城の様子がしばしば詩に詠じられ始める。これらは主に四つに大別できるようだ。以下、初盛唐と大曆期の詩人の作で、代表的なものを挙げてみよう。便宜上、( )の中に『全唐詩』の巻数のみを記す。

- ① 辺塞詩や從軍詩の一部として築城を詠み込むもの——王宏「從軍行」(三八)・楊炯「広溪峽」(五〇)・崔湜(胡皓の作ともいう)「大漠行」(五四)・駱賓王「辺夜追懷」(七九)・劉長卿「平蕃曲三首」其一(一四八)・李白「戦城南」(二六二)・杜甫「前出塞九首」其七(二二八)・李益「塞下曲」(二八三)

- ② 秦の長城建設を批判するもの―王無競「北使長城」(一六七)・沈佺期「咸陽覽古」(九六)・王翰「飲馬長城窟行」(一五六)
- ③ 築城という行為そのものを主題とするもの―杜甫「潼關吏」(二二七)・顧況「上古之什補亡訓傳十三章・築城二章」(二六八)
- ④ その他―李嶠「奉使築朔方六州城率爾而作」(五七)

以上の中で、①に属するものが最も多いが、築城の扱い方の軽重は様々で、かなり重要なものもあれば(王宏「從軍行」など)、非常に軽いものもある(劉長卿「平蕃曲」など)。

注目されるのは、②に分類した王翰の「飲馬長城窟行」である。『全唐詩』の注によれば詩題を「古長城吟」に作るという。長城の近くを通りかかり、そこにある白骨について故老に尋ねたところ、秦の始皇帝の時代に長城を築かされた人々のものだとの答えであるという場面から、亡霊たちが怨みの声を挙げる描写に入る。そして「富国強兵二十年、築怨興徭九千里」云々という句が見えている。

これは、語り手が長城に通るかかるといふ設定を陳琳の「飲馬長城窟行」にならない、築城で死んだ人民たちの苦しみを詠じたものである。主題としては、「秦王築城何太愚、天実亡秦非北胡」の句があるように、始皇帝の悪政への批判が中心となった詠史的な作品であるといえよう。もちろん、始皇帝の頃に時代設定をしても、それを借りて当時のことを批判するのは大いにありうることだが、遠い過去の築城を詠ずるため、亡霊の口を借りて怨みを述べることになり、長城建設の重労働そのものが描かれた張籍の「築城詞」とは、異なった趣を持つ。

③の中では、張籍に先行する重要な作品として、敬愛した杜甫の「潼關吏」も挙げられよう。この詩は「士卒何草草、築城潼關道」と歌い起こされ、堅固な城壁を築いて安心する潼關の吏と、それに不安を感じる杜甫の姿が詠じられている。築城の苦勞が中心ではないが、同時代の築城のことを詠じたものである。

また、③に分類される作品には、【題解】にも触れた顧況の「築城二章」がある。これは序に「築城、刺臨戎也。寺人臨戎、以墓碑為城壁」というよ

うに、築城という行為を通じて宦官の用兵を批判したものであり、築城の苦勞が中心ではない。

④に分類した李嶠の作は変わり種で、詩題に「奉使築朔方六州城、率爾而作」というように、実際に築城の役人になった経験が語られている。

同時期の詩人の作では、①に分類されるものに、王建の「涼州詞」(二九八)・「飲馬長城窟行」(二九八)や李賀の「平城下」(三九三)、姚合の「塞下曲」(五〇二)などがある。張籍自身の「漁陽將」(三八四)も、これに含まれよう。

②に分類されるものとしては、張碧の「野田行」(四六九)・鮑溶の「長城」(四八五)などがある。ともに陳琳の作をベースにしているようで、凄惨で荒涼とした情景が描かれるが、やはり死者の呪詛の声を中心であり、作業の苦しみが具体的に描かれているとはいえない。

『樂府詩集』に引く元稹の「築城詞」(四一八)は、③に分類されよう。元稹の文集や『全唐詩』は、「古城曲五解」と題し、「樂府古題」の連作の一つである。築城のことにも触れられるけれども、長城を築いて異民族の侵入を防ぐこと自体がテーマになっているようである。白居易の「新樂府五十首」の中の「城塩州」(四二六)も、辺境守備政策をテーマとしており、ここに分類されよう。

このように見てくれば、張籍は、長城建設の苦役にあえぐ民衆の姿を生きた生きと描写した、始めての詩人であるといえるのではないだろうか。

晩唐についても簡単に触れておこう。晩唐では、労働の苦勞を歌う作品が多数現れる。【題解】にも引いた劉駕の「築台詞」(五八五)・曹鄴の「築城三首」(五九二)、『樂府詩集』に収める陸龜蒙の「築城詞二首」(六二七)など、程度の差はあるが、苛酷な労働の具体的な描写が含まれている。また、先の分類の②に属するものに于漬の「長城」(五九九)や胡曾の「長城」(六四七)・羅鄴の「長城」(六五四)・蘇拯の「長城」(七一八)などがあるが、特に于漬や蘇拯の作では、民衆の苦勞の様子が具体的に詠じられている。

張籍のこの詩が、晩唐の多くの作品を導いたといえるかもしれない。